

『中世ツューリヒの恋文集』(下)

—テキスト校訂・翻訳・解説—

大木 健一郎

Mittelhochdeutscher Text¹⁾

V

Ich clage unde mag wol clagen,
daz ich nû in manegen dagen
nit gnâden kan erwerben.

ich clage, daz ich sterben
5 nit mag von herceleide.

ich clage, daz uns beide

nit ein gelîchez twinget
() unde sî () mir bringet²⁾
leit und sî doch freude hât!

10 ich clage, swes ich sie ie gebat
und mit driuwen an si gerde,
daz sie mich nie gewerde

des wider eime hâre.

ich mac wol clagen zwâre

15 von ir manic ungemach:

第五の文

我嘆く、しかと我嘆くべき子細あり。
指折り数えて幾幾日も経てあるに
恩寵に浴する縁 [エニシ] のついぞな
かりせば。

我嘆く、心中の懊悩にてこの身が
死出の覚悟いたすなんどもってのほか 5
のことなるを。

我嘆く、かの君と我と二人ながらの胸
の血の

同じ調べに踊ることなく、
かの君我に苦悩をもたらする、
さるをかの君が喜色に満ちたる風情の
口惜しき!

我嘆く、絶えず我が求めてし、 10
誠心ひたすらに渴望せしもの、
かの君我にいかんとも許したまわざり
けること、

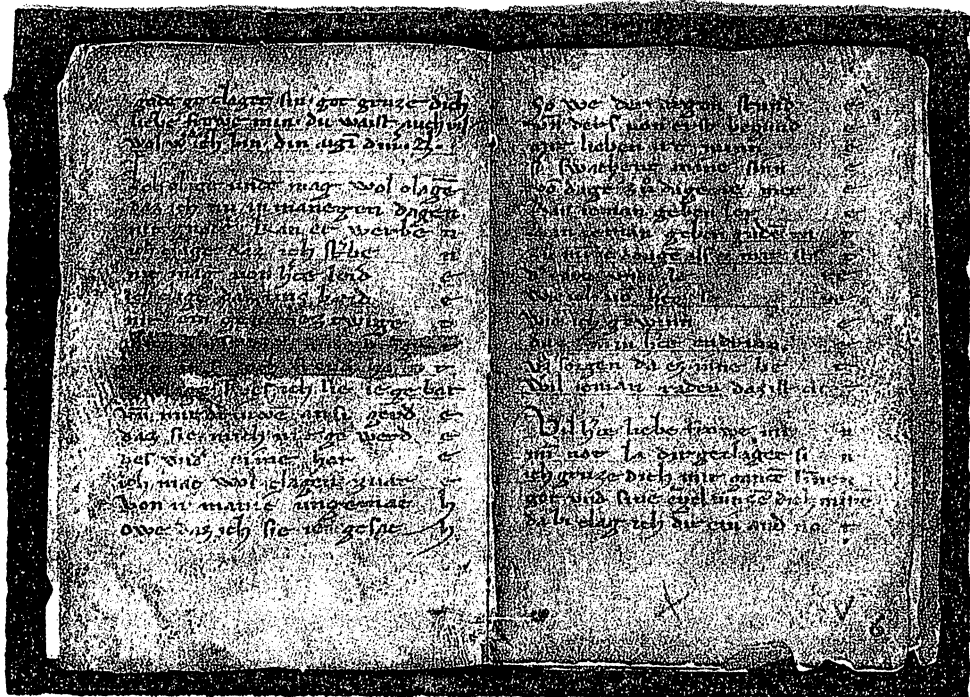
一縷の光明をだに見いださしめずに。
げに我はまことに嘆きをかこちうる身
の上なり

かの君より蒙りしあまたの辛き仕打ち 15
ゆえ:

- 1) 中高ドイツ語のテキストは基本的には Max Schiendorfer の刊本に従っているが、以下の諸文字はそれぞれ普通の活字に戻した: ① 彼が要するに Lesehilfe のために製作した文字 e (= ae, oe) → e, I (= ie) → i, û (= iu, uo, ûe) → u; ② 主に難読箇所等を Ettmüller の資料によるなどして印刷されたイタリック体の文字。本稿の性格上 Lesarten は省略した。
- 2) とくに解説困難な詩行であるが、挿入図 [→次ページ; →後書き (2)] の上から 11 行めを参照されたい、ここは全面的に Schiendorfer の読みに従った。

owê, daz ich sie ie gesach!
 so wê der argen stunde,
 und ders von êrst begunde,
 mir lieben ire minne:
 20 si swachent mîne sinne
 von dage zuo dage ie mêre!
 kan ieman geben lêre,
 kan ieman geben guden rât
 zuo minnen dougen, als ez mir stât?
 25 der râte unde lêre,
 wie ich kum von hercesêre,
 wie ich gewinne,
 daz mîn herce endrinne

あな、そのかみ、かの君にまみえたる
 こそ、悲しけれ!
 邪 [ヨコシマ] な時の翳 [カゲ] りよ、
 ああら、憎しや、
 はしなくも初めてかの君が
 恋しき思い出のくさぐさを我に楽しく
 残したるも:
 その日より波穏やかなりし我が心
 20 日ごと日ごとに怪しゅうなりぬ!
 たれぞ我に御教えを垂れたもう智者か
 ある、
 賢き知恵をご伝授あれ、
 傷つき破れにし我が秘め事にことよせ
 て?
 訓戒と教示とを下されん御仁はいずこ
 25 にやある、
 いかな処方箋にて我が胸の奥の沈痛な
 る惨苦を免れしむる、
 権謀術数、三十六計の限りを尽くし、
 我が心の臓を虜 [トリコ] にしたる憂



	愁の牢獄より
ûz sorgen, dâ ez inne lît:	脱兎のごとく脱走する抜け道やござらん：
30 wil ieman râden, daz ist cît !	一言を乞いたし、いまこそ最後の時ならん！ 30
VI	第六の文
Vil herceliebe frouwe mîn,	我がいとどしんそこ大切な奥方様、
mîn nôt lâ dir geclaget sîn.	何とぞ我が苦衷ご憫察あれや。
ich gruze dich mit gancen sinnen,	我お方様にご挨拶申し上げたてまつる、
got und sîne engel muzen dich minnen.	神妙に、
5 da bî clag ich dir ein ander nôt:	神と神の天使の皆様、お方様を慈しみたまえかし。
mîn herce ist nâch dînen minnen dôt.	つきましても我が困窮、願わくは、ご 5
dû gêst mir vil digge daugen	明察めされ：
minneclîch vor den augen,	我が心の臓は死に瀕しております、
alse der liehde sunnen schîn.	お方様恋しさのため。
10 gnâde, liebe vrowe mîn,	お方様には二六時中他人の眼にも触れず
hilf mir ûz mînen neten,	愛らしげなご様子にて我が眼の前にお
dîne minne wollent mich dœten.	出まし遊ばさる、
owê, gelebet ich noch den dac,	あたかもきらりと輝く太陽の光さながら。
dâ vil wol geschehen mac,	お恵みを下され、我が情けあつき奥方 10
15 daz dû mir soldest nâhen	様、
und mit armen ummevâhen:	必死の困苦から我を助けられよ、
da were suzer minnen vil.	お方様一筋の恋心に燃えつき果てなん
sich, frowe, welch ein minnen spil !	我が命の火を。
	あわれ、かりそめにも、もし九死に一
	生を獲得、
	ついにもおろがめうるか、かくのごと
	き大安吉日、
	我が身の傍らにお方様お近づきなさり、 15
	我と我がでに両の腕もてかき抱かる
	宵：
	真実これぞ甘美なる恋の結実ならめ。
	やよ、奥方様、恋の祭りの宴[ウタゲ]

ich enkan dir nû nit vil gesagen,
20 wan ich enmac mich nû nit wol gehaben,

die wile daz dîn vil werder lip
von mir so lange verre lit.

gnâde, frowe, gnâde mir,

so wil ich immer dienen dir.

25 enhilfes dû mir nit ûzer nôd,

so bin ich sicherlichen dôt!

はかく終りたけれ!

我さらにはお方様に何の言葉もなし、
我ただいまほかに振る舞いの仕様もなき身、

またくやんごとなきお方様のお姿
いよよ久しく遠く我よりさかりてあれば。

お恵みを、奥方様、お恵みを下さりませ、

とわに我お方様が変わらぬご奉公を誓うものなれ。

お方様に救出のお志一切ござなくんば、
25 この我が身を、

やがて我紛うかたなく鬼籍に入りておろうものよ。

VII

i

Zuhdig
und minneclich
ists, di mich
in liebe hât gebunden.

5 Mich mag behagen,
daz ich clagen
unde sagen
sol ir mîne wunden.

In freuden sweben
10 muz mîn leben,
wil si geben
drôst in mînre swere.

Kan ich gern,
si kan gewern:

第七の詩 (ライヒ)³⁾

その一

作法をこころえ、
いとおしさも加え、
かの君と我
恋の糸に繋がれたる。

さぞや快かるらん、
5 我、好きに嘆かん
そして語らなん
かの君に心のなかの数数の傷。

喜びに漂い
我暮らすなり、
10 かの君我に
苦難に耐うる糧をくるれば。

乞うる我を、
許さるべしとぞ:

3) →後書き(1)ライヒについて。

- 15 wie mag verbern
ir zuht di scône hêre!
- 良き躰けを無と、
はしき誇りかな君、なしうるや!
- 15
- ii
- Kan ich biden
mit guden siden,
si kan binden
20 und entwinden
nôt in herceleide.
- 懇願するなれば
礼儀を尽くせや、
かの君は結ぶ
またほどく
獅子身中の困窮の紐。
- 20
- Ir jugent
hât dugent:
swi si dut,
25 doch ist gut
di liebe âne unterscheide.
- かの君若くして
美德に富んで:
何事をなすに、
すべて良し、
愛らしき女人には無条件なるぞ。
- 25
- In jungen jâren
wol gebâren:
swîgen lâzen,
30 reden mâzen
kan di seldomere.
- 青春の日日に
正しき身持ち:
沈黙を避け、
適度に語れ、
みな承知しており、幸せを掴むものは。
- 30
- Si kan mit freuden
drûren leiden,
suzen clagen
35 nit versagen:
si hât der zuhde lêre.
- かの君喜悦に溢れつつ
悲しみにもひたぶるに辛抱、
甘き嘆きの溜め息も
無下には撥ねつけられぬとよ:
生得、女人の鏡にてありつるか。
- 35
- iii
- Ir scône, ir zuht
hât bernde frucht
frôlich bi,
40 gebresten frî,
stille und offenbere.
- その三
美しさと身の嗜み
稔り多き収穫を生み、
楽しきをも伴う、
何一つ落ち度なく、
関わりなし、人の眼のあるとなしとに
は。
- 40

Sî gît ende
 âne missewende.
 ir jugent clâr
 45 hât gut gebâr:
 si ist ungenâden lere.

物にけじめをつけ、
 あまり支障も起こさで。
 清潔なる若さと
 行ないもまたみごと： 45
 して、情け知らずの君ともみえざれば。

Kusche, reine,
 frô, gemeine,
 valsches bar,
 50 fin und clâr
 ist di grundelôse.

純粹、かつ、純潔、
 朗らにして高ぶらず、
 嘘、偽りとは無縁に、
 優雅にして麗しき、 50
 こはよに底知れぬ謎を秘めたる女人。

Mit freuden zam,
 der minnen stam
 ist di wise,
 55 di ich brîse:
 si ist der dugende clôse.

喜びに慣れ親しめど、
 この恋の申し子、
 賢き女人とて
 讃えまつりたけれ、 55
 まさに、美德の僧院の主 [ヌシ] にて
 あるならん。

iv
 Wer wil spehen
 unde sehen
 di vil guden,
 60 hôch gemuden,
 daz er doch belîbe

その四
 眼を凝らし、
 眼を見開き、
 みめ良き女人を
 高き心の持ち主を 60
 まのあたりにしてやはり思い止まるな
 どとは、

Alsus, daz minne
 in sîne sinne
 nit endrage
 65 sende clage
 nâch ir werden lîbe?

恋心はあれ、
 胸内にひそめ、
 燃えて届けぬ
 憧れの長太息、 65
 あてやかな女人求めて発しえぬもの
 ありや？

Sî gît smercen
 jungen hercen,
 sî kan wunden

苦しみをかの君
 うら若き男の子の胸に
 深く広く傷つけなされ

- 70 zu allen stunden
unde wunden heilen.
- いついかなる折りにとて、
またその重き痛手をまったく平癒させた
もう。
- Si gît beide
lieb mit leide;
si ist, di kan
- かの君の贈り物、
愛の喜びと悲しみと。
かの君のご器量が
- 75 an sendem man
leit von libe deilen.
- 憧れを抱けるものには
悲しみと分け隔て、喜びも下賜なさる。
- v
- Owê, daz ich nit wesen muz
- その五
あわれ、あわれ、かの君とともに
おられぬとは、
- bî ir, daz dut mir immer wê:
so sanfte dut mir ir werder graz.
- つねに我が身に應えることぞ、これ。
かの君の優しき挨拶の言の葉は身に
しみて嬉しきものかな。
- 80 ir kel ist wîz alsam der snê,
ir wangen clâr, ir munt ist rôt:
geleid ie man so grôze nôt?
- かの君の喉の辺りは雪のごと真白にて、
両の頬は明るく、唇は赤し：
かつて耐え忍びにし男の子のありや、
この痛恨の危機？
- si endrôste mich, oder ich bin dôt!
- かの君我が心の慰謝となりえずんば、
我にはただ死あるのみ。

後書き

(1) ライヒ (Leich) について：語源はゲルマン語の *laikaz = Spiel, Tanz, Bewegung であり、Lied および Spruch と並ぶ中高ドイツ語の叙情詩の主要ジャンルの一つである。ラテン語の続誦 [sequentia] からの直線的な演繹は今日では一般的に放棄されているが、この形式の確実な起源はいまだに実証されていない。個々の点ではライヒの構造形式は極めて複雑かつ多種多様である。常に本質刻印的な事柄は、大抵は対になって形成されている・押韻された・不等の形式単位、短詩 [Versikel]、が1回ないし数回韻律的に・音楽的に繰り返される、ということであり、あるいは導入部・中間部・終結部に個別的な短詩たちを伴うこともある。短詩たちの規模は長短様々であるが、4行ないし8行の短詩群が相対的に頻繁である。内容的には中世盛期には宗教的なライヒと恋のライヒとが普通な作物であって、後年には踊りのライヒがこれに加わってくるが、第14世紀の中葉から芸術的なライヒなる形式はドイツでは消滅してゆく。第13世紀のドイツのライヒのメロディーは、ミンネザングの場合と同様に、稀にしか伝承されていないけれど、教会の続誦のケースでは最初の短詩を半分の合唱隊が歌唱し、つぎの短詩を他の半分の合唱隊が応唱し、導入部や終結部等を

全員が合唱するものであるとするなら、我がライヒにおいてははかがなものであったろうか?

第七の詩に関しておおよそ図式的に簡略化していえば：①その一は $\{(A_x \cdot A_1 - A_2 \cdot B_y) + (C_x \cdot C_1 - C_2 \cdot B_y)\} + \{(D_x \cdot D_1 - D_2 \cdot E_y) + (F_x \cdot F_1 - F_2 \cdot E_y)\}$; ②その二 / その三 / その四は $\{(A_1 - A_2 \cdot B_1 - B_2 \cdot C_y) + (D_1 - D_2 \cdot E_1 - E_2 \cdot C_y)\} + \{(F_1 - F_2 \cdot G_1 - G_2 \cdot H_y) + (K_1 - K_2 \cdot L_1 - L_2 \cdot H_y)\}$; ③その五は $(A_1 - B_1 \cdot A_2 - B_2 \cdot C_1 - C_2 \cdot C_y)$ となるであろう。大文字のラテン文字は短詩を、同じラテン文字は同一の脚韻を表示し、また添字のラテン文字の X は導入部を、同じく Y の文字は終結部を、添字の数字 1-2 は対をなしている短詩 (半短詩 [Halbversikel]) をそれぞれ意味している。

なお, Schiendorfer (1988: 79) もいうごとく、手紙集の最後に入れられた第 5 番めの Leich はもしかすると独立の Lied の詩節ともみられうる。

(2) 挿入図は原写本の第 5^v 紙葉と第 6^r 紙葉とを、すなわち：例の疑惑のアラビア数字を含む第四の文の末尾の 3 詩行分と第五の文および第六の文の冒頭の 5 詩行分を原寸の約 1,2 倍に拡大コピーしたものである。

(3) なお半韻は上編・下編合計 10 個ほど存在する。

(4) 上編と同様に下編においても、原テキストに対応して、日本語による素朴な脚韻を踏む試みが継続されている。

(5) 表題は今回少し変更した。

書誌

I テキスト

Ettmüller, Ludwig (1844): Sechs Briefe und ein Leich nebst einigen Bemerkungen über die Frauenliebe im Mittelalter. In: Mittheilungen der Antiquarischen Gesellschaft in Zürich. Bd. 2, 97-115.

Schiendorfer, Max (Bearb.) (1988): mine sinne di sint minne. Zürcher Liebesbriefe aus der Zeit des Minnesangs. [Beilage: Faksimile im Originalformat] (Zollikon), 38-59; Die Rezension von Jürgen Schulz-Grobert, AfdA 100 (1989), 138-141.

II 参考文献

Beyschlag, Siegfried (1969): Altdeutsche Verskunst in Grundzügen (Nürnberg), 70-73.

Hoffmann, Werner (1981): Altdeutsche Metrik. 2. Aufl. (Stuttgart), 111-113.

Kuhn, Hugo (1965): Leich. In: Kohlschmidt, Werner / Mohr, Wolfgang (Hgg.) (1965): Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte. 2. Aufl. Bd. 2 (Berlin), 39-42.

Paul, Otto / Glier, Ingeborg (1974): Deutsche Metrik. 9. Aufl. (München), 93-95.

Schiendorfer, Max (Hg.) (1986): Johannes Hadlaub. Die Gedichte des Zürcher Minnesängers (Zürich / München).

Schulz-Grobert, Jürgen (1993): Deutsche Liebesbriefe in spätmittelalterlichen Handschriften zur Überlieferung einer anonymen Kleinform der Reimpaardichtung (Tübingen).